健全なる身体に健全なる精神：ユウェナーリスの『風刺詩』第10編について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院看護学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 精神, 身体, ユウェナーリス, 風刺詩 キーワード (En): mind, body, Juvenal, Satire 作成者: 廣田, 麻子 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180403-125

大阪市立大学看護学雑誌　第5巻（2009. 3）

健全なる身体に健全なる精神：ユウェナーリスの『風刺詩』第10編について

A Sound Mind in a Sound Body: On Juvenal's *Satire* X

廣田麻子

Asako Hirota

Abstract

The purpose of this article is to clarify the meaning and connotation of the proverb "a sound mind in a sound body" back in Juvenal's *Satire* X by way of its grammar and context. The proverb is interpreted to say that a sound mind dwells in a sound body in Japanese. It can be interpreted alike in English, too. But when I seek its meaning back in Juvenal's *Satire* X in Latin, I have found out that the proverb says that it should be prayed that a sound mind may dwell in a sound body. Juvenal tells us not to be ambitious and to live modestly just praying that a sound mind may dwell in a sound body.

Key Words: mind, body, Juvenal, Satire

要　旨

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という日本語の言い回しは、英語のことわざ"A sound mind in a sound body"から来たものであるが、さらに元をたどれば、ローマの詩人ユウェナーリスの『風刺詩集』第10編第355行の"Orandum est ut sit mens sana in corpore sano."（Mayor, 1983a）にたどりつく。本稿の目的は、この詩行をラテン文法に従って直訳し、さらに前後関係の文脈についても、英語訳を介さずラテン語からの直訳を示すことにある。その結果、この詩行は「健全な精神が健全な肉体にありますように、と祈られるべきである」と直訳できることが分かる。ユウェナーリスは、人間はあれこれ分不相応な欲望を持つけれども、願い事をするならつつましく健全な精神が健全な肉体にありますように、と祈られるべきであると述べているのである。

キーワード：精神、身体、ユウェナーリス、風刺詩

I．目　的

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」（宮腰，1983）という日本語の言い回しは、英語のことわざ"A sound mind in a sound body"（池田ら，1994）から来たものであるが、さらに元をたどれば、ローマの詩人ユウェナーリス（ラテン語表記ではDecimus Junius Juvenalis、英語表記ではJuvenal）の『風刺詩集』（ラテン語表記では

平成20年9月30日受付　平成21年1月7日受理

別刷請求先：廣田麻子　〒545-0051 大阪市阿倍野区旭町1－5－17

大阪市立大学看護学研究科・医学部　Osaka City University Graduate School of Nursing

06－6645－3531

Satvrae、英語表記では*Satires*）の第10編第356行の"Orandum est ut sit mens sana in corpore sano."（Mayor, 1979a）にたどりつく。本稿の目的は、この詩行をラテン文法に従って直訳し、さらに前後関係の文脈についても、英語訳を介さずラテン語からの直訳を示すことにある。そうすることによって、ユウェナーリスがこの詩行で言わんとしていることを明確にする。

Ⅱ．方　法

まず、日本語のことわざ辞典、英語のことわざ辞典により、表記ことわざが日本語・英語でいかに解釈されているかを調べた。次に、ラテン語の詩行をラテン文法に従い直訳した。さらに、前後関係の文脈についても、英語訳を介さずラテン語からの直訳を試みた。

Ⅲ．結　果

Ⅲ．A.「健全なる精神は健全なる身体に宿る」

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」（宮腰，1983）という日本語の言い回しがある。この言い回しはすっかり日本語に定着して、『故事ことわざ辞典』（宮腰，1983）や『世界ことわざ辞典』（柴田ら，1995）の中に項目として見受けられる。解説によると、「精神と身体とは一体であって、身体が健康であれば精神もこれに伴って健康であるということ」（宮腰，1983）であるらしい。ここからは、まず体の健康が何よりも大切で、体が健康になれば心も自ずと健康になってくるものだ、という主旨のことが読み取れる。実際この表現は、教育や体育の場でよく使われているようである。身体の鍛練で健康で強靭な肉体を手に入れなさい、そうすれば心も自然と健康で強くなるのだ、というようなメッセージが読み取れる。

Ⅲ．B. "A sound mind in a sound body"

ところでこの言い回しは、英語のことわざである "A sound mind in a sound body"（池田ら，1994）から日本語に入ってきたものらしい。よく見ると動詞がないことに気づく。これは「健全なる身体の中の健全なる精神」というフレーズであって、健全なる精神があるとか、ないとか、宿るとか、そこまではなにも述べられていない。だからこそ、使う人が自由に解釈して使ってもよいわけで、現にCarlton Football ClubやCanadian Militaryなどがこのことわざを自分たちのモットーとしているところからすると、日本語の言い回しの場合と同じように、身体鍛錬の勧めととらえられていることがわかる。また身体鍛錬だけでなく、体と心をバランスよく鍛えることを勧める教育の理念のようになっているとも考えられる。

Ⅲ．C. "Orandum est ut sit mens sana in corpore sano."

日本語にも英語にも見られるこの言い回しの起源は、実はラテン語にまでさかのぼることができる。ローマの風刺詩人ユウェナーリスの『風刺詩集』の第10編第355行に

> "Orandum est ut sit mens sana in corpore sano."（X, 365）
> （Mayor, 1979a）

という一節が見られる。これはいったいどういうことを言っているのだろうか。ラテン語を詳しく読み解いてみることにする。

まず、orandumはōrō（祈る）の動形容詞である。ラテン語の動詞には、英語にはない動形容詞という形があって、受動的な意味をもち、義務・必要・適性の概念を含む。orandumとest（英語のbe動詞に当たる動詞の直説法・3人称・単数・現在）を組み合わせて、動形容詞の述語的用法となっている。ここは、非人称構文になっていて、「ut以下のように祈られるべきである。」という、受動的な義務を表現している。utは、英語でいうthatのようなものである。sitは 英語のbe動詞に当たる動詞の接続法・3人称・単数・現在の形である。utの導く従属文では接続法が使われるのである。接続法というのは、直説法のように客観的な立場からの表現ではなくて、話者の意志・願望・可能性の見通しなど、主観的な立場を表わす法である。「～であったらいいのになあ」というようなときに使う。

次に、願望の内容を検討する。mensは「精神」を意味する女性の第3変化名詞の単数・主格である。sanaはmensにかかる第1・第2変化形容詞sanus,-a,-um「健全な」の女性・単数・主格である。性・数・格の一致により、mensとsanaはつながっていることがわかる。inは前置詞で、奪格を支配して「～の中で」を表す。corporeは「肉体」を意味する中性の第3変化名詞corpusの単数・奪格である。sanoは「健全な」を意味する第1・第2変化形容詞sanus,-a,-umの単数・中性・奪格であり、corporeを修飾している。同じ「健全な」という意味を表す形容詞でもsanaとかsanoというように形を変えるのは、その形容詞が修飾する名詞の性・数・格に一致するからである。

さて、これでこの詩行の意味は理解できる。すなわち、

「健全な精神が健全な肉体にありますように、と祈られるべきである。」となるはずである。

Ⅲ．D. “Orandum est ut sit mens sana in corpore sano.” の登場する文脈

それでは、その詩行がどんな文脈の中に現れるかを検討する。

ユウェナーリスの『風刺詩』第10編は、次のように始まる。

Omnibus in terris, quae sunt a Gadibus usque
Auroram et Gangen, pauci dinoscere possunt
vera bona atque illis multum diversa, remota
erroris nebula. quid enim ratione timemus
aut cupimus? quid tam dextro pede concipis, ut te
conatus non paeniteat votique peracti?（X, 1-7）(Mayor, 1979b)
西はヒスパニアのガーデースから東は曙のガンジスまで広がるこの世界で、過ちの靄を吹き払って、真の善とそれとは正反対のことを真の善の中から見つけ出すことのできる人はまずいない。理性に従えば、われわれは一体何を恐れ、あるいは何を欲しがるのだろうか。今までに祈願され、そして成就された試みのうちで、あとになって後悔しないような、そんな縁起の良い願い事がどこにあるのだろう？（拙訳）

そして、多くの人々が神に願うであろう富、地位、才能、栄光、長寿、美貌について、いずれもそんなものを願うことはやめておくようにと痛烈に戒めていく。

たとえば、人並み外れた努力によってせっせと金を貯めこんでも、その金の重みで押しつぶされて身を滅ぼした例はいくらでもあると説いておいて、

cantabit vacuus coram latrone viator.（X, 22）(Mayor, 1979c)
手ぶらの旅人なら盗賊に出くわしても鼻歌でも歌っているだろう。（拙訳）

と言っている。また、権力者は往々にしてひどい妬みを買うために、転落の憂き目を見るものであり、いいことがあれば必ず同じだけ悪いことがあるものだとすれば、成功や名声にどれほどの価値があろうか、と問いかけている。学校に通う子供たちはキケローのような雄弁の才能を与えて下さいとお祈りするが、キケローはその才能ゆえに頭と手首を切り落とされたのだから、才能があっても非業の死を遂げるだけだと説く。さらに次のようにも述べている。

unus Pellaeo iuveni non sufficit orbis,
aestuat infelix angusto limite mundi,
ut Gyari clausus scopulis parvaque Seripho;
cum tamen a figulis munitam intraverit urbem,
sarcophago contentus erit. mors sola fatetur,
quantula sint himinum corpuscula.
（X, 168-173）(Mayor, 1979d)
ひとつの世界は、若いパッラエウス（マケドニアのアレクサンダー大王）にとっては満足のいくものでない。不幸な彼は、世界の狭い境界線に苛立つ。まるでギアロス島（エーゲ海の小島）の岩とセリフィス島（エーゲ海の小島）に閉ざされたかのように。しかしながらその彼も、煉瓦職人によって作られ守られた町（バビロン）にいったん入ってしまえば、死体を食い尽くす棺桶で満足するだろう。死だけが、人の体のいかに小さいことかを明らかにするものだ。（拙訳）

さらに、長生きをさせてくださいという願いについてさえユウェナーリスは、長寿がどれだけ沢山の不幸に満ちているかを考えてみよと言い放ち、老人の顔の醜さを描写する。一方、美人になりますようにという願いにしても、美しいとあちこちで不倫を働くだけで、その仕返しに刺し殺される者もいれば鞭で血が出るほど打たれるものもいるというように、手厳しく皮肉っている。

それならば、なにも神にお祈りしてはいけないのかということになってくるが、何か願い事をしたいのなら、“Orandum est ut sit mens sana in corpore sano.”（健全な精神が健全な肉体にありますように、と祈られるべきである。）という風にこの一節が出てくるのである。そして最後にユウェナーリスは、

fortem posce animum, mortis terrore carentem,
qui spatium vitae extremum inter munera ponat
naturae, qui ferre queat quoscumque labores,
nesciat irasci, cupiat nihil et potiores
Herculis aerumnas credat saevosque labores
et Venere et cenis et pluma Sardanapalli.
monstro quod ipse tibi possis dare. semita certe
tranquillae per virtutem patet unica vitae.
（X, 356-363）(Mayor, 1979e)
強い心を君は求めよ。死の恐怖を持たない強い心を。人生の最後の時を、自然からの賜物のうちと考える強い心を。

どんな苦労にも耐えることができるような強い心を。怒ることを知らず、何も欲しがらないような強い心を。（アッシリアの最後の王）サルダナパルスの愛と美食と華美よりも、ヘラクレスの苦難と厳しい辛苦をよりよいものと考えるような、強い心を。私は君自身が君に与えるがよいものを示している。人生を平穏に過ごす唯一の道は、正しい行いにより、必ず開ける。（拙訳）

と述べているのである。

Ⅳ. 考　察

ユウェナーリスは、健全な精神が健全な身体にあるとも宿るとも言っていない。健全な精神が健全な身体にあったらよいのになあ（この部分は願望であって真実ではない）と祈られるべきだ、と言っている。接続法であることによく注意すれば、「健全な精神が健全な肉体に宿る」というのは決して事実ではないことがわかる。それどころか、そのことが神様に祈られるべきであるというくらい、ふつう人間が手にすることができないことであるとも考えられる。

人間はあれこれ分不相応な欲望を持つが、そんなことを願って仮に手に入れたところでろくなことはない、願い事をするならつつましく「健全な精神が健全な肉体にありますように、と祈られるべきである。」という主張がその詩の中に示されていると考えられる。

引用文献

池田彌三郎，ドナルド・キーン監修/常名鉾二郎編集（1994）：日英故事ことわざ辞典，北星堂書店，東京，188.

Mayor E. B. (1979a): Thirteen Satires of Juvenal with a Commentary by John E. B. Mayor, Arno Press, New York, 52.

Mayor E. B. (1979b): Thirteen Satires of Juvenal with a Commentary by John E. B. Mayor, Arno Press, New York, 41.

Mayor E. B. (1979c): Thirteen Satires of Juvenal with a Commentary by John E. B. Mayor, Arno Press, New York, 42.

Mayor E. B. (1979d): Thirteen Satires of Juvenal with a Commentary by John E. B. Mayor, Arno Press, New York, 46.

Mayor E. B. (1979e): Thirteen Satires of Juvenal with a Commentary by John E. B. Mayor, Arno Press, New York, 52.

宮腰賢編（1983）：故事ことわざ辞典，旺文社，東京，150.

柴田　武，谷川俊太郎，矢川澄子編（1995）：世界ことわざ大事典，大修館書店，東京，1153.